

くしゃくしゃになった紙

甲府市立南中学校三年 今井 ラウフ

私は父がパキスタン人、母が日本人のハーフだ。そして一人の妹と、二人の弟がいる。私たち一家はイスラム教徒である。よって、豚由来のものやアルコールはもちろん、肉類に関しては祈りを捧げながら処理したものでなければ口にすることはできない。そのため、学校の給食は食べられず、毎日母が作った弁当を持参していた。周囲の同級生からは、なぜ給食を食べないのか、アレルギーが多くあるのかと度々聞かれた。「普通と違う」このことは仲間との隔たりのように感じることもあった。だが、時間が経つにつれて私のことをよく理解してくれる人も増え、決してつらくはなかった。

自分が小学五年生のときの話だ。妹は宗教の定めごとにより肌を露出してはいけないため、スカーフを身にまとっていた。ある日妹が「同級生にいじめられている。」と言ってきた。周囲と違う事によりいじめや差別が起こる可能性があることは頭に入れていたが、実際に起きると焦ってしまった。とりあえず何をされたのかを聞いてみると「お前って何人なの。」と言われたそうだ。いじめと言ってきた割にはたいしたこと無いのと思い、妹には「パキスタンと日本のハーフだって言えばいいんだよ。」と言い、そこまで気に留めなかった。だがしばらくすると、その同級生が故意に椅子をぶつけてくるようになり、ついには雑巾を投げつけてくるようになった。それを聞いた私は、完全なる「いじめ」だと判断し、いじめをする子のもとへ行った。なぜ妹をいじめなのかを聞くと、反応は無かった。もう二度といじめないでほしいと言うと、黙ったままうなずいた。実際、その後のいじめはなくなった。だが「いじめられた」という事実をただ受けとめるだけではならないと思う。でなければ、いじめられて受けた苦しみや悲しみを味わう人がまた出ることになるだろう。

そもそも、いじめをする「加害者」はいじめられている側の人の気持ちを分かっているのだろうか。もちろん、いじめられた側の人は簡単に理解されたくはないだろう。むしろ、理解なんかされてたまるか、と怒

りが湧き上がってくるかもしれない。心に刻まれた傷は、謝罪でも、お金でも、権力でもどうすることも出来ない。つまり元に戻せないということだ。くしゃくしゃに丸めたプリントを広げても、しわができてきれいにすることができないことと同じように……。

ではいったい、どうすれば苦しみの種となる「いじめ」を自分達の手で少しでも減らすことができるのか、自分なりに考えてみた。まずは相手のことを自分と同じ一人の人間だときちんと認識し、思いやりの心を持つ必要があると思う。だが、それをするのが誰もができるようにあれば、もともとこの世界にいじめはもちろん、争いや戦争はないはずだ。そうでないのは「思いやり」を持つことが容易ではないからだ。そこで、今度は「思いやり」を持てるようにする方法を考えてみた。すると一つ目は、相手を尊重すること。二つ目は、自分の行動を客観視すること。最後に物事をポジティブに考えること、この三つが最も重要だと感じた。実際に相手を尊重すれば、相手を自分と同じ大切な一人の人間だと認識でき、行動を客観視すれば、間違った行動に気づくことができ、ポジティブに物語を考えられれば、自然と笑顔でいる時間が増えると思う。この三つはいじめの問題だけでなく、差別問題や日々の生活においてもとても大切なことだと感じた。

これから自分だけでなく、家族や友人にもこの三つのことを伝えていき、いじめや差別で苦しんでいる人を少しでも救いたい。そして最終的には、すべての人が思いやりを持った平和な世界を自分たちの手で創り上げたい。